『論集』の終刊にあたって

駒澤大学北海道教養部長
岩永宏治

駒澤大学北海道教養部は平成十一年をもって教育機関としての歴史的使命を終えますが、学術研究誌である『北海道教養部論集』も本号をもって終刊とせざるをえなくなりました。この『論集』は、それまで本学の唯一の学術研究誌であった『紀要』（昭和四十二年創刊）に加えて、もっと研究発表の場を拡大すべきとの要望を契機として昭和六十一年より刊行されてきました。本誌は、その際『紀要』とは異なる特徴をもつ研究誌と位置づけようとの合意によって、以下のような編集方針に基づくことが確認されました。

第一に、執筆者の資格を拡大して研究発表の場を内外に広く提供することによって、問題意識やテーマの多様化をすすめるだけでなく、観点や研究方法についても諸見解を掲載して知的刺激の向上を目指していくこと、第二に、その内容も論説だけでなく資料・研究ノートを含むあらゆる研究成果を網羅することによって、研究意欲を高めていくこと、そして、総じて研究・教育の発展に多いに寄与できる質の高いものにしていくことなどであります。

この編集方針は、基本的に北海道教養部の教育課程ならびに教員構成の特色を反映したものといえます。本誌が以上のような位置づけをどこまで一貫させその目的の実現にどの程度貢献できたのかは、学術誌のもつ本来の性格からしても簡単に評価を下すことはできません。どちらかといえば、本誌の編集方針が、他方ではとらえどころのない総花的な研究誌になる面をそれ自体内包し体系性という点で、必ずしも満足のいくものではなかったかもしれません。しかしながら、本誌が今日まで継続発刊できたのは、それなりの成果を反映してその必要性が認められてきたからだといえます。いずれにせよ、本誌が途中で休刊・廃刊されることなく最後まで継続できたのは、本学専任教員の研究への拘りや発行実務にかかわった教職員の努力によるだけではありません。非常勤の先生方を含む学外の方々が積極的に執筆にかかわっていただいたことによって、一定の量的・質的向上がなされてきたからであり、また全国の大学・研究所等からご寄贈いただいた研究誌のなかで示された問題意識や方

法論などを多面的に参考にできたからにほかなりません。『論集』にかかわっていただいた関係諸氏・関係機関の方々に対して、ここにあらためて深く感謝する次第です。

これまでの経験を生かし、新しい機関での研究・教育の質的・量的向上に多いに貢献できる学術研究誌を新たに創造していくことを決意して終刊の辞と致します。